

3
王
聖徒伝 120

「主のかすかな 声を聴きとろう」

列王記第一 19章

シナイ山の荒野で

アウトライン

0. イントロダクション

I. 絶望の淵で 19章1～8節

II. ホレブでの神の顕現 19章9～18節

III. エリシャの召命 19章19～21節

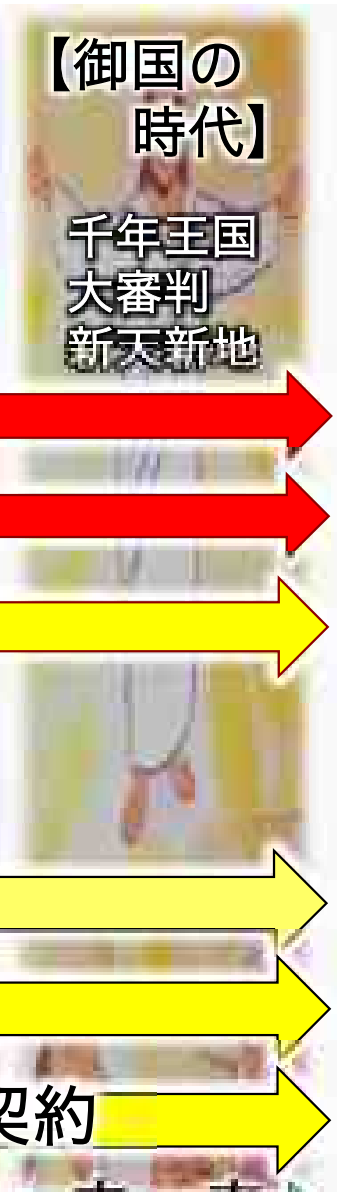
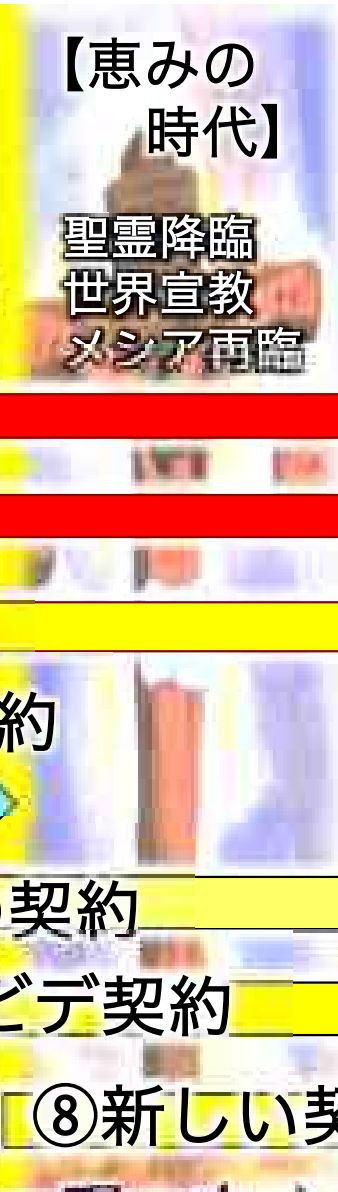
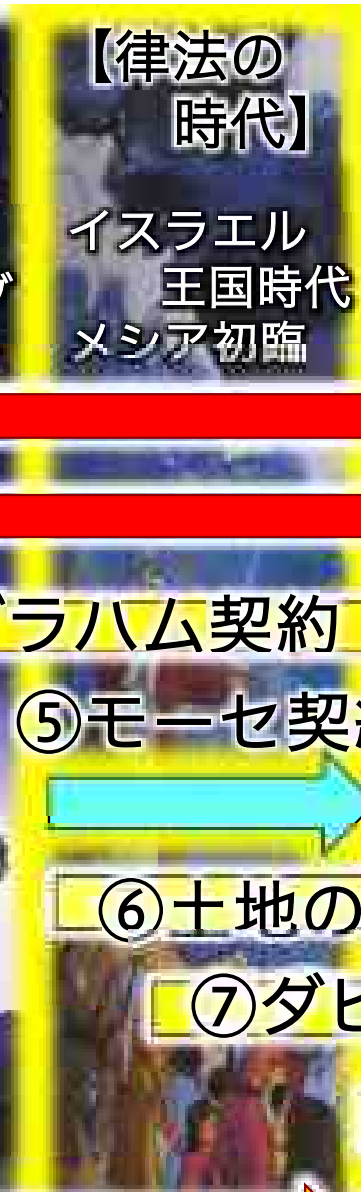
IV. まとめと適用

闇の中に輝く光

弱さを力に変えるために



ホレブ山脈シナイ山



【無垢の時代】

天地創造

【良心の時代】

墮罪
~大洪水

【人類統治の時代】

バベルの塔事件

【約束の時代】

アブラハム
~ヤコブ

【律法の時代】

イスラエル王国時代
メシア初臨

【恵みの時代】

聖霊降臨
世界宣教
メシア再臨

【御国の時代】

千年王国
大審判
新天新地

①エデン契約

②アダム契約

③ノア契約

④アブラハム契約

⑤モーセ契約

⑥土地の契約

⑦ダビデ契約

⑧新しい契約

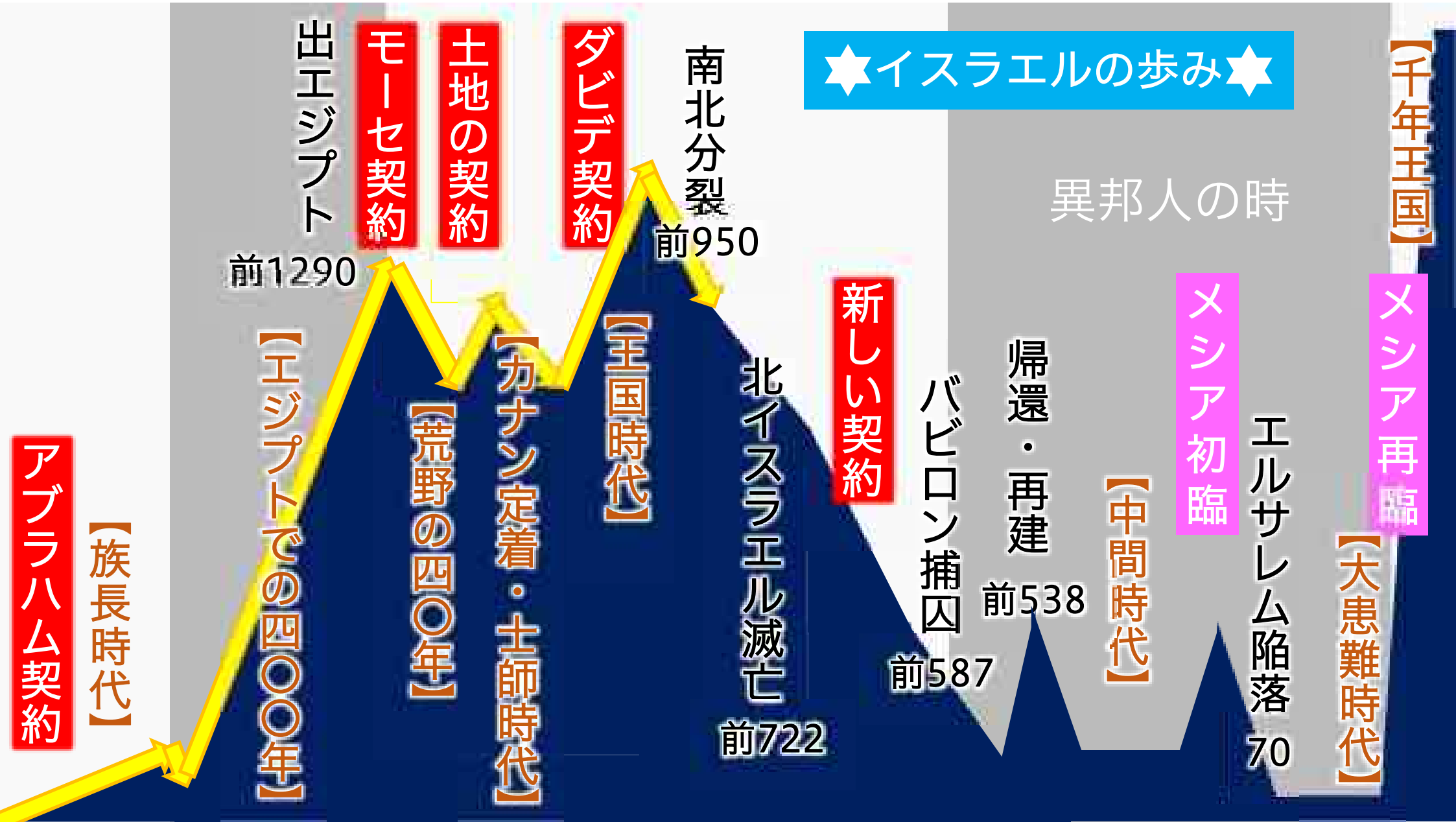
どの時代も
神の約束が礎にある

過去

現在

未来

★イスラエルの歩み★



アブラハム契約

【族長時代】

【エジプトでの四〇〇年】

出エジプト

前1290

モーセ契約

土地の契約

【荒野の四〇年】

【カナン定着・士師時代】

ダビデ契約

【王国時代】

南北分裂

前950

北イスラエル滅亡

前722

新しい契約

バビロン捕囚

前587

帰還・再建

前538

【中間時代】

メシア初臨

エルサレム陥落

70

【大患難時代】

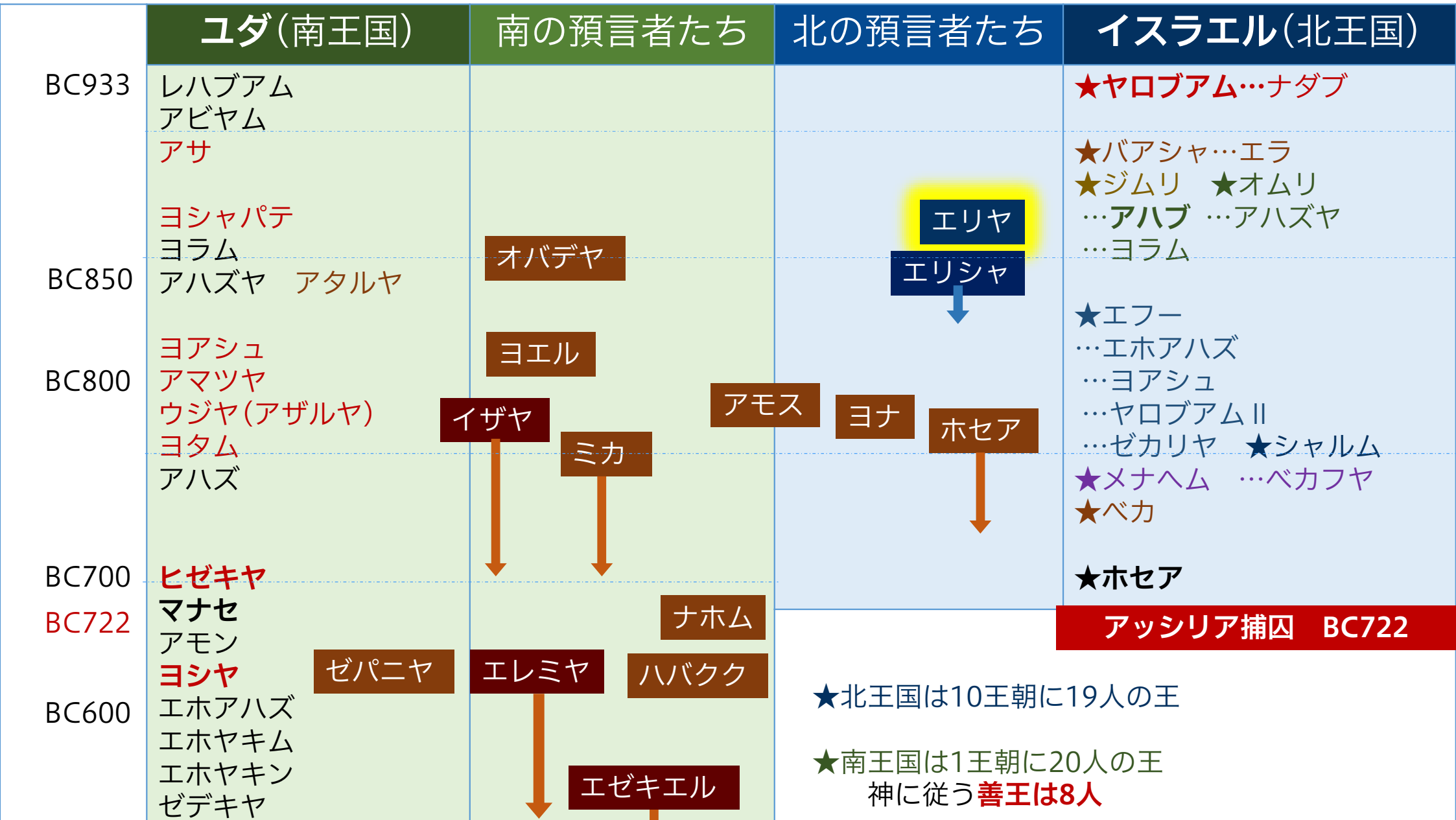
メシア再臨

【千年王国】

列王記 (第一〜第二)

第一	1〜11章	ソロモン王の治世 神殿建築	イスラエル(統一王国)		
	12〜16章	王国の分裂	ユダ(南王国)	イスラエル(北王国)	
第二	17〜22章	預言者エリヤ	レハブアム アビヤム アサ ヨシャパテ ヨラム アハズヤ アタルヤ ヨアシュ アマツヤ ウジヤ ヨタム アハズ ヒゼキヤ マナセ アモン ヨシヤ エホアハズ エホヤキム エホヤキン ゼデキヤ	オバデヤ ヨエル イザヤ ミカ エレミヤ エゼキエル	ヤロブアム…ナダブ バアシャ…エラ ジムリ オムリ…オムリ…アハブ …アハズヤ…ヨラム エフー…エホアハズ …ヨアシュ …ヤロブアムII …ゼカリヤ シャルム メナヘム ベカフヤ ベカ ホセア
	1〜2章			エリヤ エリシャ アモス ヨナ ホセア	
	2〜13章	預言者エリシャ			
	14〜17章	二つの王国の歴史 北王国滅亡まで			
	18〜25章	ユダ王国の歴史 滅亡まで			

★北王国は10王朝に19人の王
★南王国は1王朝に20人の王



墮落の一途をたどった北王国の末路

■ ソロモンの死後、王国は分裂。北王国の王となった**ヤロブアム**は、金の子牛を築き、レビ人を追放、偽祭司を立て、偶像を蔓延させた。

■ 背教の末、ヤロブアムの一族は、二代目ナダブの時代に全滅。

➔ 以後、北王国は王朝が変わる度に、王族は全滅。

■ 王たちはことごとく**ヤロブアムの道**に進み、闇は深まっていった。

■ 北王国7代目の王**アハブ**は、ヤロブアムの罪も軽く見えるほど。

イゼベルを妻とし偶像礼拝を国の礎に!!

北王国は最悪の時代に!!

預言者の系譜

■ **預言者**とは、「**神の言葉を預かり、民に告げる者**」

→ **予見者、神の人**とも呼ばれる。…アブラハム、モーセも預言者。

■ 最初に**預言者**を組織化したのが、サムエルだった。(1サム10章)

ダビデが組織した奏楽隊は、**預言者**集団でもあった。(1歴25:1)

■ **預言者**たちは、神の律法を学び、人々に教えた。

危機の時代には、時に、**神の直接の言葉(預言)**を王や民に告げた。

→ **預言**の多くは、叱責や警告。時に、称賛や奨励も。

■ イスラエルの背教により滅亡がせまる南北時代、

預言者の働きが強まっていく。

**南北時代は、
預言者の時代!!**

北王国 イスラエル

【ヤロブアム王朝】

ヤロブアム

22年

ナダブ
2年

【バアシャ王朝】

バアシャ

24年

エラ
2年

ジムリ
7日

北王国最悪の時代 

エリヤ

エリシャ

イゼベル 

【オムリ王朝】

オムリ

12年

アハブ 

22年

ヨラム

アハズヤ
2年

12年

南王国 ユダ

レハブアム

17年

アビヤム
3年

アサ 

40年

ヨシャパテ 

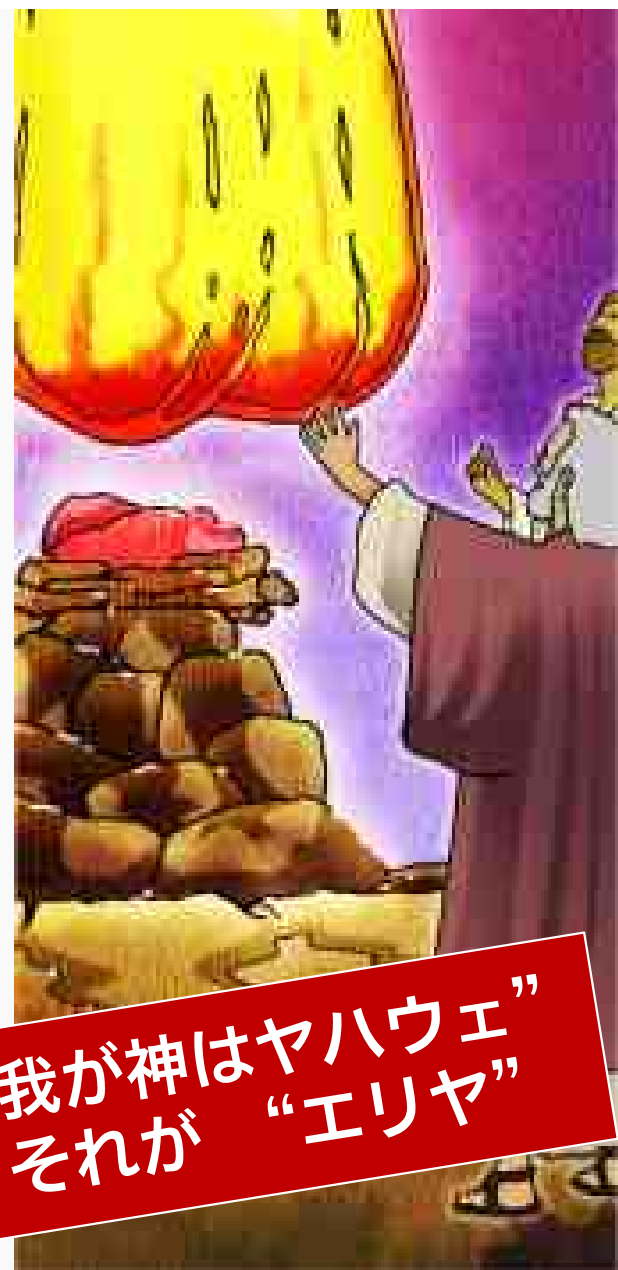
25年

ヨラム

8年

【カルメル山の対決】 | 列王記18章

- アハブ王に、主の干ばつの裁きを告げた後、荒野から異邦の地を巡っていたエリヤは、3年目に主に命じられてサマリアに上り、カルメル山で、バアルの預言者350人と対決した。
- 主は、炎を下し、祭壇を焼き尽くされた。民は悔い改めて、偶像の預言者たちを殺した。
- 大雨が降り、エリヤは、神の預言者としての働きを全うしたのだった。



“我が神はヤハウエ”
それが “エリヤ”



Ⅰ. 絶望の淵で

Ⅰ 列王記19章1～8節

【イゼベルの呪い】 | 列王記19:1~2

アハブは、エリヤがしたことと、預言者たちを剣で皆殺しにしたこととの一部始終をイゼベルに告げた。

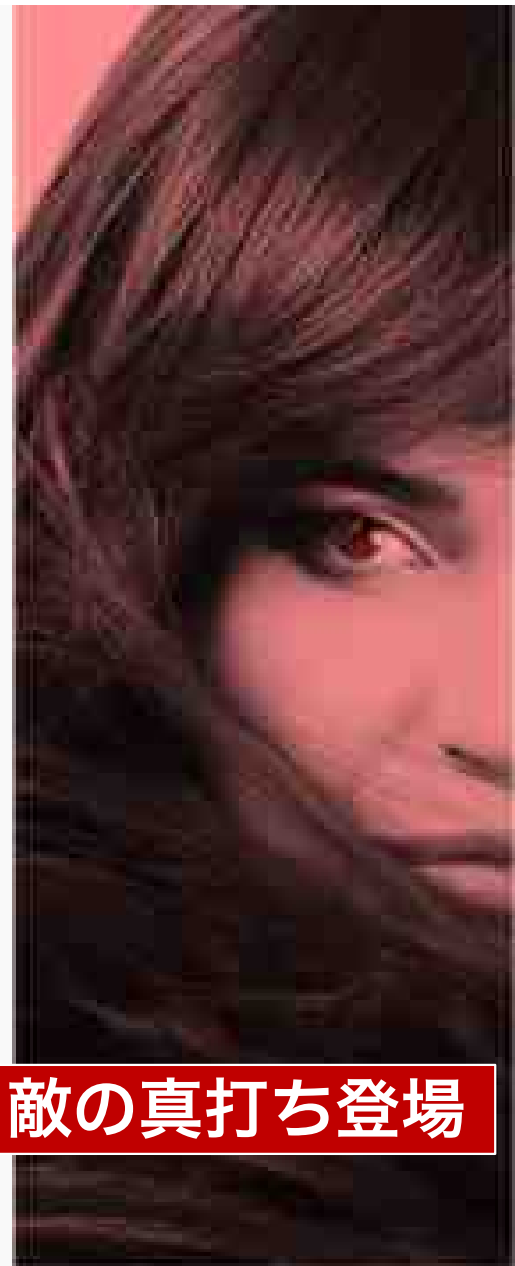
すると、イゼベルは使者をエリヤのところに遣わして言った*。「もし私が、明日の今ごろまでに、おまえのいのちをあの人たちの一人のいのちのようにしなかったなら、神々がこの私を幾重にも罰せられるように。」

*実質的な支配者は、イゼベルだと明らかに!!

■この時代にサタンが直接働きかけていた人物は？

➔エリヤは、本当の敵に生身で直面したのだろう。

敵の真打ち登場



【逃れるエリヤ】 | 列王記19:3~4

彼はそれを知って立ち、自分のいのちを救うため立ち去った。ユダのベエル・シェバ*に来たとき、若い者をそこに残し、自分は荒野に、一日の道のりを入れて行った。

*アブラハムも宿営していた最南の町

■北王国から、エルサレムも通り過ぎて荒野までやって来た。

➡ただならぬ恐怖と絶望に捕らえられたエリヤの姿がよく現れている。

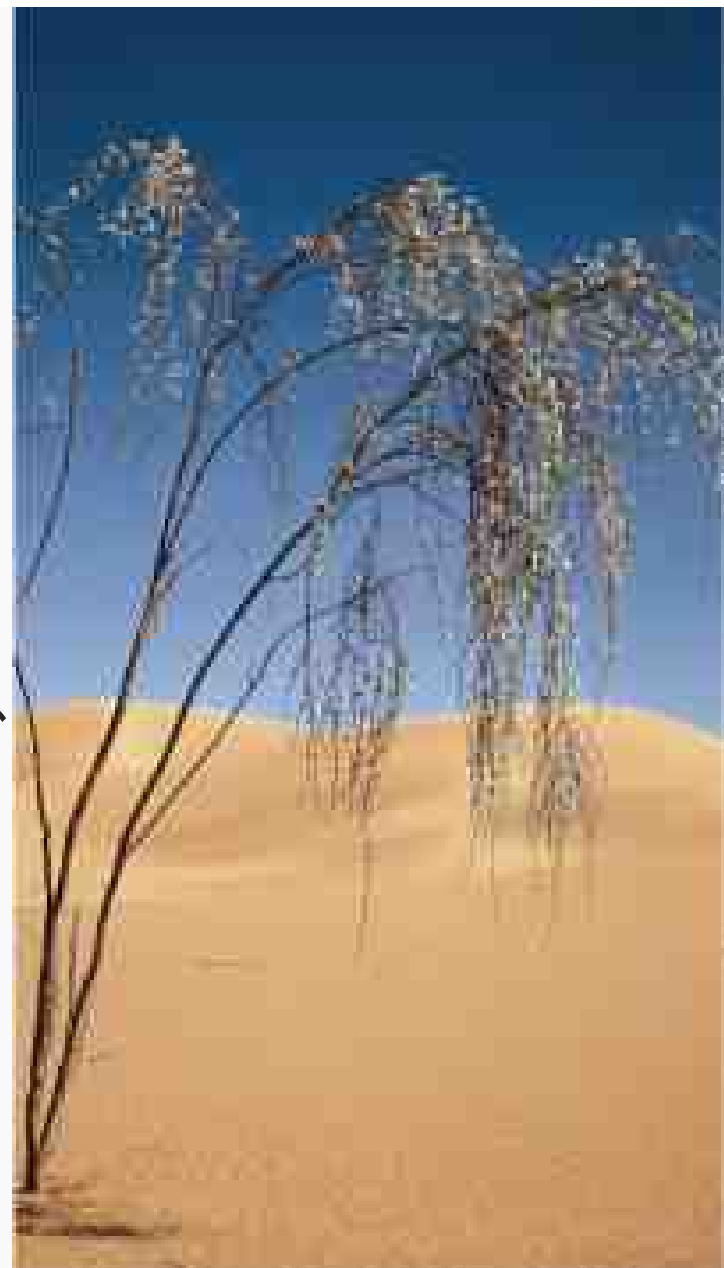


【死を願うエリヤ】 | 列王記19:4

彼は、エニシダの木の陰に座り、自分の死を願って言った。「【主】よ、もう十分です。私のいのちを取ってください。私は父祖たちにまさっていませんから。」

■ アハブに裁きを告げ、荒野で、異邦人世界で、孤独の内に逃亡生活を過ごし、450人のバアルの預言者たちと対決し、主の臨在を見た。

→ 紛れもなく信仰の勇者であるエリヤが
これほどの絶望に陥ったという現実!!



【一人の御使い】 | 列王記19:5～6

彼がエニシダの木の下で横になって眠っていると、見よ、一人の御使い*が彼に触れ、「起きて食べなさい」と言った。

彼が見ると、見よ、彼の頭のところに、焼け石で焼いたパン菓子一つと、水の入った壺があった。彼はそれを食べて飲み、再び横になった。

*この時点では、一人の御使いとしか分からない。



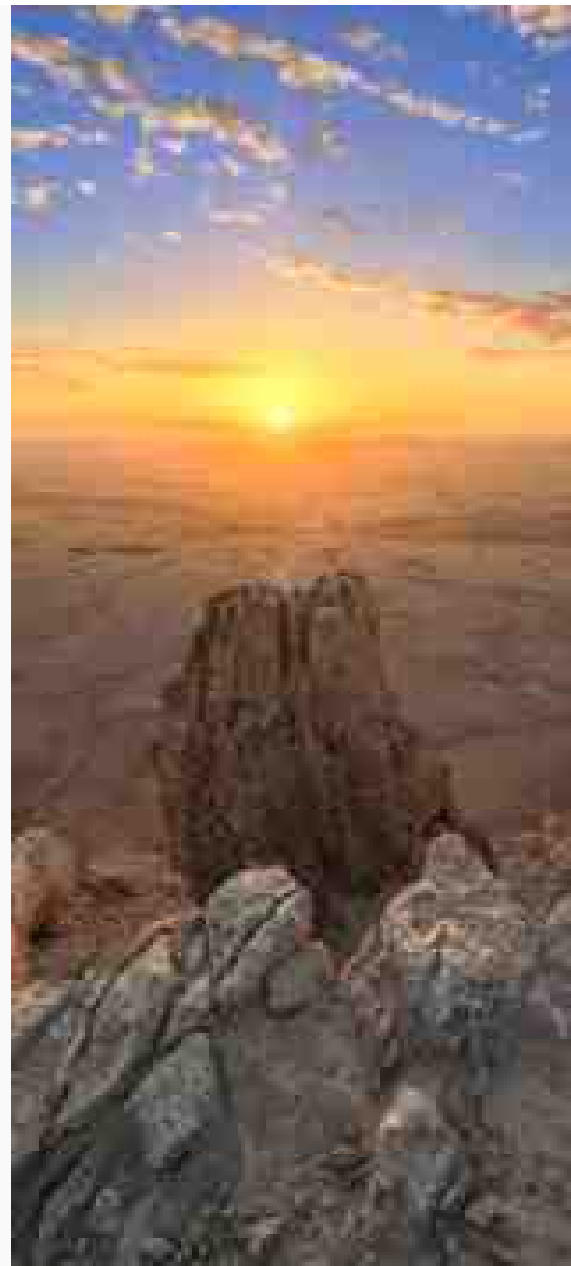
【主の使い】 | 列王記19:7

【主】の使い*がもう一度戻って来て彼に触れ、「起きて食べなさい。旅の道のりはまだ長いのである」と言った。

*アブラハムに現れ、ヤコブと格闘し、イスラエルをエジプトから導き出した “主の御使い”

「アブラハムが生まれる前から、わたしはある
(ヨハ8:58)」

受肉前のメシア 第三位格の神



【主の使い】 | 列王記19:8

彼は起きて食べ、そして飲んだ。そしてこの食べ物に力を得て*、四十日四十夜歩いて、神の山ホレブ*に着いた。

*荒野のイスラエルをマナが養ったように。

*イスラエルは40年。メシアは40日。

約400kmの道のり。

*シナイ山(ホレブ山脈)

アブラハムが律法を授かったその地。

契約の民イスラエルのルーツをたどる旅





II. ホレブでの神の顕現

I 列王記19章9～18節

ホレブ山脈

【主のことば】 | 列王記19:9

彼はそこにある洞穴に入り、そこで一夜を過ごした。
すると、【主】のことばが彼にあった。主は
「エリヤよ、ここで何をしているのか*」と言われた。

*もちろん、主はご存じである。

■主が問われるのは、私たちの心の状態。

私たちの本質的なありようそのもの。

■「ここで何をしているのか」

私たち一人一人が問われている。



【エリヤの答え】 Ⅰ列王記19:10

エリヤは答えた。「私は万軍の神、【主】に熱心に仕えました。しかし、イスラエルの子らはあなたとの契約を捨て、あなたの祭壇を壊し、あなたの預言者たちを剣で殺しました。ただ私だけが残りましたが*、彼らは私のいのちを取ろうと狙っています。」

*エリヤの悲痛な実感。

イゼベルに現れた巨悪に立ち向かう者はいない。

➡真のイスラエルは、滅ぼされようとしている。



【主の前で】 | 列王記19:11

主は言われた。「外に出て、山の上で【主】の前に立て。」するとそのとき、【主】が通り過ぎた。【主】の前で激しい大風が山々を裂き、岩々を砕いた。しかし、風の中に【主】はおられなかった。風の後には地震が起こったが、地震の中にも【主】はおられなかった。

*5度も記される【主・ヤハウエ】の名。

■大風も地震も火も、主の明らかな顕現、神の栄光・シャカイナグローリー。

→闇に落ちこんだエリヤには、主が見えない。



律法授与の前の
主の顕現の再現だが...

【主の細い声】 | 列王記19:12

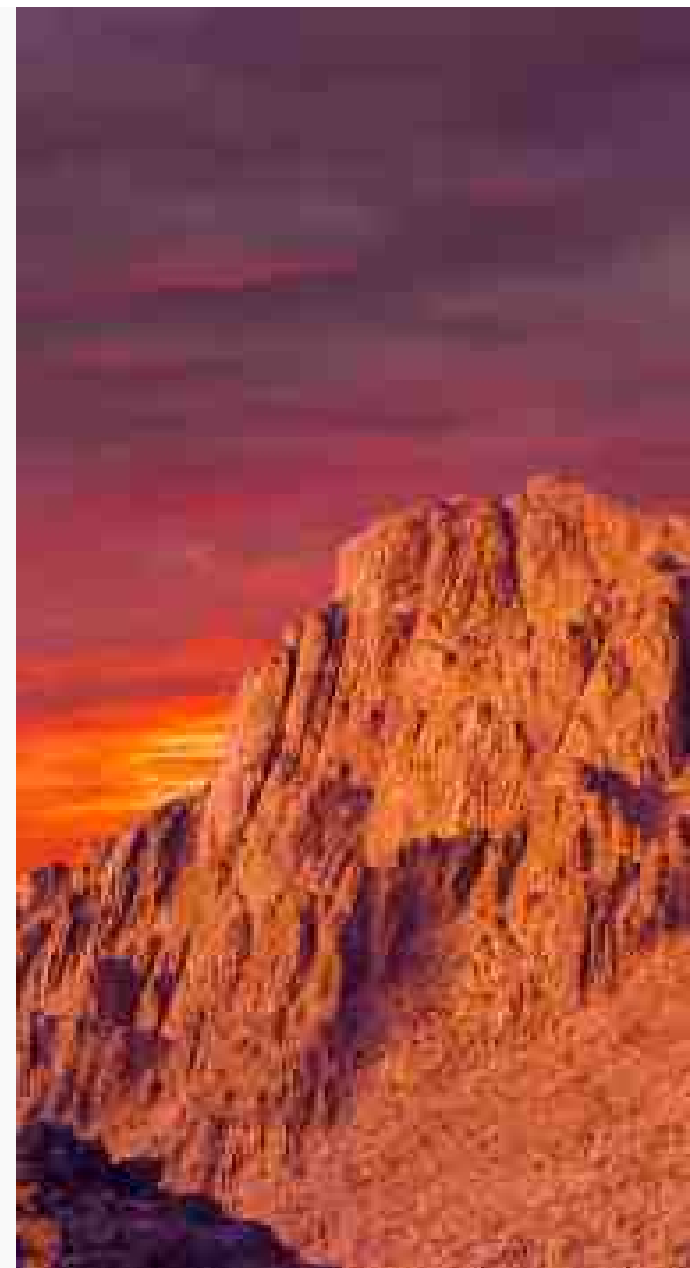
地震の後に火があったが、火の中にも【主】はおられなかった。しかし火の後に、かすかな細い声があった*。

*“地震ののち、火、でも、主はいない。

しかし、火ののち、声、細いささやき”

■ 深い闇の底に落ちこんだエリヤに

主は細いささやきで、語りかけられた。



【主の細い声】 | 列王記19:13

エリヤはこれを聞くと、すぐに外套で顔をおおい*、外に出て洞穴の入り口に立った*。すると声がして、こう言った。「エリヤよ、ここで何をしているのか*。」

*主の前で顔を覆う。へりくだりの姿勢。

*ようやく主の前に立つことができた?!

洞穴の中にずっと閉じこもっていた?!

*二度目の問いかけ。



【繰り返す答え】 Ⅰ列王記19:14

エリヤは答えた。「私は万軍の神、【主】に熱心に仕えました。しかし、イスラエルの子らはあなたとの契約を捨て、あなたの祭壇を壊し、あなたの預言者たちを剣で殺しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうと狙っています。」

■ 10節と同じ答えを繰り返すエリヤ

神とエリヤで同じやりとりが二度繰り返される。

➡まだ解かれきっていないエリヤの心。



【主に遣わされるエリヤ】 | 列王記19:15

【主】は彼に言われた。「さあ、ダマスコの荒野へ帰って行け。そこに行き、ハザエル*に油を注いで、アラムの王とせよ。」

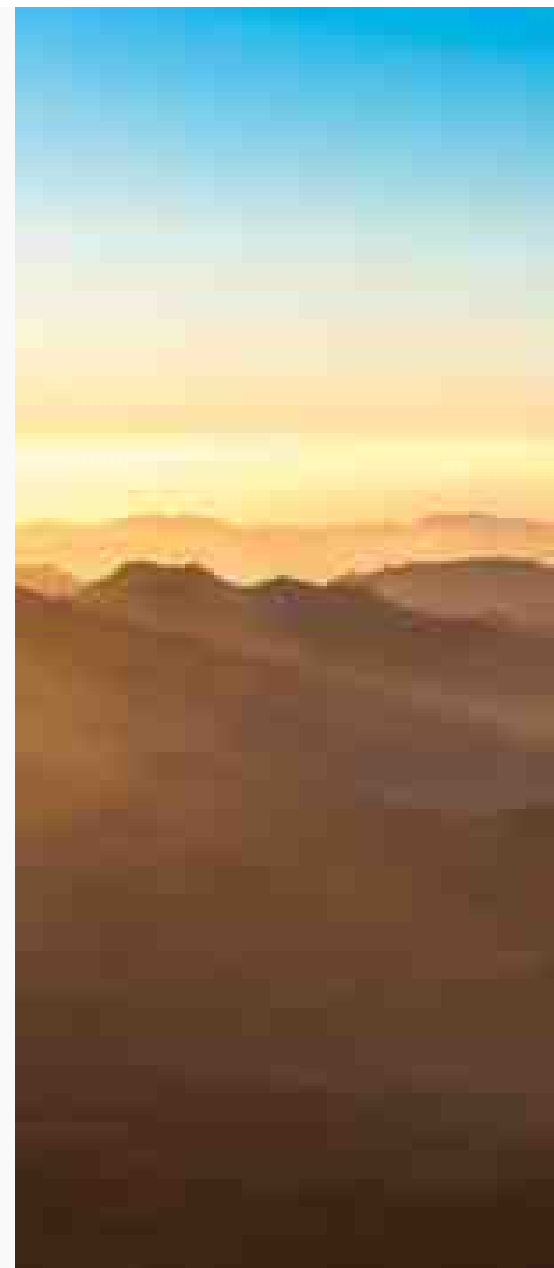
*“神を見た一人”

ハザエルが王となるのはエリシャの時(Ⅱ列8:8～)

■アラムの王ハザエルは、神の裁きの器とされ、北方からイスラエルに苦難をもたらすこと。

➔エリヤに具体的な使命を与えられる主。

落ちこんだ魂には、主による派遣が必要。



【エフー、エリシャ】 | 列王記19:16

また、ニムシの子エフー*に油を注いで、イスラエルの王とせよ。また、アベル・メホラ出身のシャファテの子エリシャ*に油を注いで、あなたに代わる預言者とせよ。

*“ヤハウエは彼” …エリシャに油を注がれる。

➔アハブの子ヨラムとイゼベルを殺し、

オムリ王朝の息の根を止めることに(Ⅱ歴9章)

*“エリシャ(神は救い)”

“マーシャー(引きあげられた)”

➔モーセにも通じる?!



【イスラエルの残れる者】 | 列王記19:17~18

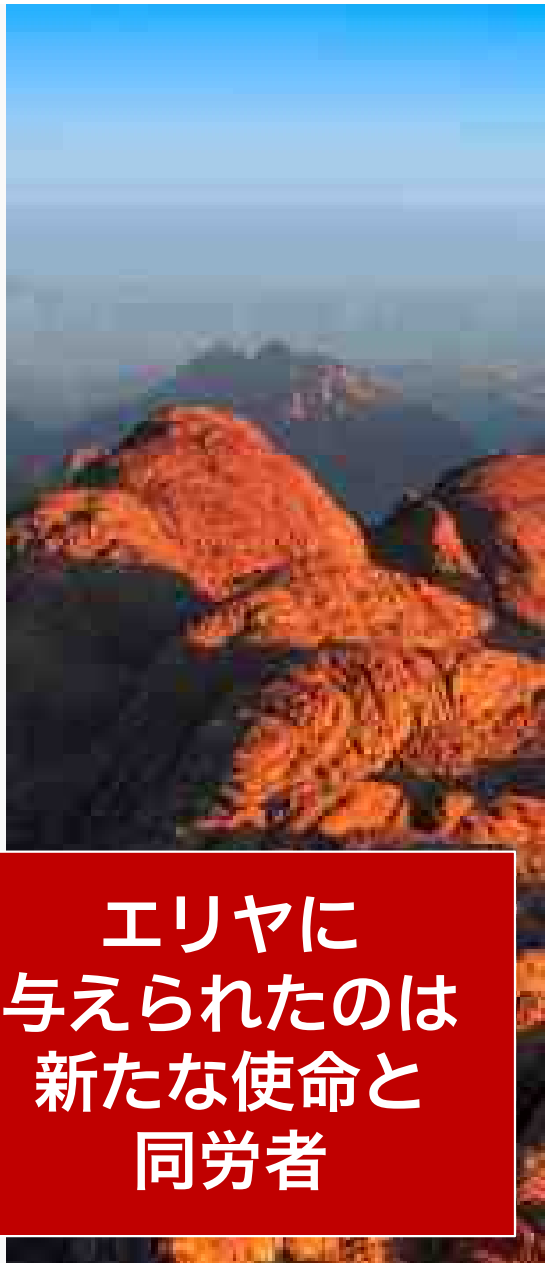
「ハザエルの剣を逃れる者をエフーが殺し、エフーの剣を逃れる者をエリシャが殺す。

しかし、わたしはイスラエルの中に七千人*を残している。これらの者はみな、バアルに膝をかがめず、バアルに口づけしなかった者たちである。」

*“七つの雄羊(雄牛)の群れ” …千の単位を示す

■七は完全数。数百万のイスラエルでは中では少数でも、神の目には十分な数が残されている。

→真のイスラエルは、いつの時代にも少数
(レムナント・残れる者)



エリヤに
与えられたのは
新たな使命と
同労者



Ⅲ. エリシャの召命

Ⅰ 列王記19章19～21節

丘陵に咲くアーモンド

【エリシャ】 | 列王記19:19

エリヤはそこを去って、シャファテの子エリシャを見つけた。エリシャは、十二くびき**の牛を先に立て、その十二番目のくびきのそばで耕していた*。

*二頭で一くびき。24頭の牛。

肥沃で広大な農地、たくさんの家畜、大勢の使用人。

➔ひとときわ豊かな家の生まれだったエリヤ

*12は、イスラエルを象徴する数。

*富豪の息子にも関わらず、謙遜で勤勉なエリヤ。

麦打ち場で番をして寝ていたボアズを思い出す。



【エリヤの外套】 | 列王記19:19～20

エリヤが彼のところを通り過ぎるとき自分の外套を彼に掛けた*ので、エリシャは牛を放って、エリヤの後を追いかけて言った。

*外套は、風雨をしのぎ、野宿では寝袋代わりにも。荒野で命を守るのもの。

■外套を掛けられて、後継者への任命を即、理解。

→聖書で他に同様の例はない。

エリシャの靈的感性の鋭さ、豊かさ。

神を恐れる信仰者だったと分かる。



【エリシャの応答】 | 列王記19:20

「私の父と母に口づけさせてください。それから、あなたに従って行きますから。」エリヤは彼に言った。「行って来なさい。私があなたに何をしたか*。」

*好きなようにしなさい。という表現。

➡エリシャを召されたのは主ご自身。

神の召命への応答は自由意志によるべきもの。

■富を捨て、家を出て、主に従うことを決意。

➡対象的なのは、富を捨てられず、

主イエスの前を立ち去った青年(マタイ19:22)



【エリヤに仕えたエリシャ】 | 列王記19:21

エリシャは引き返して、一くびきの牛を取り、それを殺して、牛の用具でその肉を調理し、人々に与えてそれを食べさせた*。それから彼は立ってエリヤについて行き、彼に仕えた。

* 神の召命を家の者たちと祝うエリシャ。
両親との別れの食卓でもあった。





IV. まとめと適用

闇の中に輝く光 弱さを力に変えるために

シナイ山に注ぐ朝日

【エリヤの陥った孤独と恐れ】

- 荒野で鳥に養われ、異邦人の地シドンで過ごし、長らく孤独な逃亡生活を続けていたエリヤ。
- 3年ぶりに会った弟子オバデヤは、アハブを恐れきっていた。
- 450人のバアル預言者に劇的な勝利をおさめたエリヤだが、イゼベルの呪いの一言で、事態はすべて覆される。
- 実質的な支配者イゼベルの怒りに、人々も震え上がったのだろう。むき出しの悪意にさらされて、エリヤの心は深い闇に落ちこんだ。

【シナイ山へ】

- エルサレムの都も素通りし、荒野で死を願ったエリヤ。
主は見捨てず、主の使いがエリヤを食べさせ、力づけた。
- イスラエルの足取りをさかのぼり、シナイ山に上ったエリヤ。
40日の苦難の日々も、主がエリヤを支え、守られた。
- 激しい主の顕現によっても、主の声を聞き取れないエリヤに、
主は、細いささやきの声で呼びかけられた。
深い闇の底に落ちこんだ心にも、主は語りかけてくださっている。

【主の問いかけ エリヤの応答】

■「ここで何をしているのか」

主の二度の問いかけに、エリヤは絶望と孤独を訴えるだけだった。すべて道は立たれてしまった。もうどこにも希望はない。エリヤの目に見えていたのは、紛れもなく一つの現実だろう。

■それ以上のやりとりはない。エリヤにもう言葉はなかった。

主が告げられたのは、エリヤのなすべき次の使命。後継者エリヤの指名。そして、バアル礼拝を拒み通した真のイスラエル7千人が残されていること。

【この世の現実・信仰者の使命】

- 罪に満ちたこの世には、否定し得ない孤独と絶望が確かにあり、逃れようなく捕らえられてしまう時が、信仰者にも避けがたくある。
- 主はエリヤを責められなかった。
「ここで何をしているのか」と 思い起こさせたのはエリヤの使命。
主の言葉を民に伝え、民に主の言葉を伝える後継者を育むこと。
- 主の使命に歩む後継者エリシャと、同労者・残された者7千人を、主はすでにエリヤのために備えられていた。

【何度でも確認すべき 使命に歩む信仰者の原則】

- 主の使命に生きるなら、すべての必要は満たされる。
繰り返し、主の派遣の原則を確認しよう。

「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。マタイ6:33」

- “主イエス・キリストは、私の罪のために十字架にかけられ、死んで葬られ、死を打ち破って復活された”
この**福音**を信じた者は、神の目に義と認められ、永遠に神の国の民として生きることを約束されている。

すべての信仰者が生きるべきは、福音を告げ知らせるこの使命

【弱さを力に変えるために】

- この世には、その事実を知るだけで打ちのめされる深い闇がある。信仰のゆえに、容赦ない敵意、悪意を向けられることすらある。圧倒的な敵の前に、私たちの生身の心は、あまりにもろい。
- 私たちの弱さを、私たち自身よりもはるかに深くご存じで、なお私たちを用いられる主をただ信頼しよう。聖書の約束に堅く立ち、福音を告げ知らせていくならば、友も兄弟姉妹も、共におられる主が与えてくださるから。

私は弱い。この私を用いてくださる主をこそ、誇り、頼ろう!!

II コリント人への手紙第二 12:7~9

その啓示のすばらしさのため高慢にならないように、私は肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高慢にならないように、私を打つためのサタンの使いです。

この使いについて、私から去らせてくださるようにと、私は三度、主に願いました。

しかし主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。

世の闇は増していくが むしろその中で輝きをます光がある
そのような光の一つとして用いられていこう

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの罪(つみ)を贖(あがなう)うために十字架で死に、

②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、

③三日目に復活(ふっかつ)したことを信じます。

エリヤのおちいった 孤独(こどく)と絶望(ぜつぼう)は、

わたしと無縁(むえん)ではありません。

巨大(きょだい)な敵(てき)の前に、

わたしはあまりに 無力(むりよく)です。

弱いこの身(み)を用いて、

主よ、あなたの栄光(えいこう)を 現(あらわ)してください。

深まる闇(やみ)の中で、なお輝(かがや)きを増(ま)す光としてください。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」